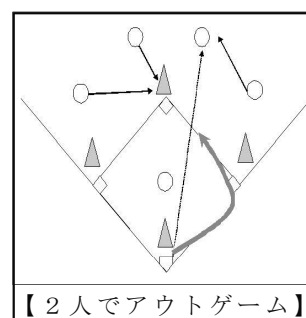


実際のゲームでは、右図のように、打球とアウトにしたい塁にそれぞれ2人ずつ集まればよいことにした。投げる技能を簡略化することで、アウトを取るためには、打球を追いかける人、アウトにする塁に移動する人のそれぞれの役割が必要であり、相手の攻撃を予測し、打球の方向に応じて、誰がどこに行くのかを考えることができるようにしたのである。



- つまずきの原因を「個人因子」と「環境因子」から探る。
- 教材開発では、「環境因子」に対しては環境を整える働きを、「個人因子」に対しては個人に直接働きかけをそれぞれ行う。

## 2 思考活動を繰り返す場の設定

ロシアの発達心理学者ヴィゴツキー（1896～1934年）は、子どもが独力で自主的に解決する問題によって決定される現下の発達水準と、子どもが教師やその他の人々との共同の中で問題を解決する場合に到達する水準との間の相違によって決まる領域を「発達の最近接領域」と名付け、教育は「発達の最近接領域」に合わせて行うべきであると提唱した。その発達の最近接領域を意識し、少し努力すればできる思考活動を設定したり、そこから徐々に他者の援助を減らしていく思考活動を設定したりするのである。

この論を基に、特別支援教育の考えを生かして、以下のように思考活動を繰り返す場を設定していった。

### （1）継続的接近の原理を生かした単元構成の工夫

育成したい「思考力」に至るまでに、子どもの発達段階に応じて単元を構成することが大切である。例えば、子どもにとって身近なものから遠い関係のもの、難易度の低いものから難易度の高いもの、関心の高いものから関心が向きにくいものと学習を展開していくのである。

このような単元の構成を工夫する際に、特別支援教育の考え方である「継続的接近の原理」を生かすことができる。この原理は、ある目的行動に到達するために、その目的行動に似た行動を徐々に学習していくことで、やがて目的行動に到達できるということである。子どもが現在できている行動から指導を開始していき、少しずつ目的行動の獲得に近付けていくのである。

例えば、牛乳が飲めない子どもが、飲めるようにしたいとしよう。まずは、その子どもに対して、今飲むことができるココアなどにほんの少し牛乳を混ぜて飲むようにする。そして、徐々に混ぜる牛乳の割合を増やし、最後には牛乳だけで飲むことができるようにするのである。

この考えを生かした実践に、次のようなものがある。

### 第5学年体育科（保健）「けがを防ごう ―けが0宣言―」

本実践では、健康で安全な生活を送るため、交通事故や身の回りで起こるけがの原因を、人の行動とまわりの環境の両面からとらえ、防止するための具体的な手だてを見出していくことをねらった。しかし、いきなり地域の安全について考えることにすれば、多様な状況が存在するため、思考が拡散してしまう可能性がある。



【身近な危険から探る】

そこで、まず、身近な学校生活での防止策について考え、次に交通事故、そして地域の安全と思考の対象を子どもの身近なものから順に進めていった。こうすることで、前時までに学んだ内容を新しい学習にも生かすことができ、健康で安全な生活を送るための具体的な手だてを考えていくことにつながった。

## (2) 背向型の原理を生かした単元構成の工夫

単元の構成を工夫する際に、特別支援教育の考え方である「背向型の原理」を生かすことができる。この原理は、目標に近い手順から始め、徐々に最初の手順に戻っていくように学習を構成するものである。まず、目標となる行動に教師がいろいろな手だてや支援を行うことで、子どもたちは必ずできるようになる。そこから、支援を徐々に減らしていくステップで学習内容をプログラムするのである。こうすることで、最終的には一人でできるようにさせていくのである。

例えば靴下を一人ではくことができるようにさせたいとしよう。まず、靴下を最後に引き上げることだけを行う。次に、かかとをくぐらせてから靴下を引き上げさせる。そして、つま先を入れてかかとをくぐらせ、引き上げさせる。最後に、すべて自分でできるようにするのである。

その際には子どもたちはどこまでできて、どこまでができないのかを明確にとらえた上で、子どもが思考できる段階で教材を作成することが必要である。

この考えを生かした実践に、次のようなものがある。

### 第6学年国語科「物語と対話しながら — 『ばらの谷』 —」

まず、第1次で「三つの職人の物語を読んで考えたことを『読書新聞』にまとめよう」という単元を貫く学習のめあてをもたせた。そして単元第2次で三つの物語を読んでいった。

第2次では、まず、教科書教材『ばらの谷』（東京書籍、『新しい国語』六上）を読みながら、本単元で繰り返す「物語と対話する手順」（右図参照）を子どもと共に構成することで、思考活動の見通しをもたせた。

続いて、それを『ルリユールおじさん』（持ち込み教材、伊勢英子作）に活用しながら学習を進めていくようにした。さらにその後、『桃花片』（東京書籍、『新しい国語』六上）の自力読みの場を設定した。

こうすることで、「思考力」が低位であった子どもも、「桃花片」の新聞記事では「メッセージを象徴的に表すことば」とそれに対する「自分の考え」を表現することができた。

#### <物語と対話する手順（思考様式モデル）>

- ①登場人物や情景の大きな変化を見つける。
- ②物語のメッセージを表すことばを見つける。
- ③物語のメッセージを表すことばについて、感じたこと、考えたことをまとめる。

なお、この実践は「物語と対話するための手順（思考様式モデル）」を単元の中に位置付け、繰り返し活用する場面を設定した。このように思考活動を繰り返す際、思考の手順や方法を活用することも大切である。

○ 思考活動を繰り返す場を設定する際、「継続的接近の原理」と「背向型の原理」を生かして、単元の構成を工夫する。

各教科の働きかけの具体や成果については、Ⅲ章に詳述する。